

## 中央ブロック海況予報

### 今後の見通し（2010（平成22）年8月～12月）

#### (1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと。）

##### ◎潮岬以西

- ・薩南海域の黒潮北縁は、屋久島南付近の平均的な位置での変動が多く、11月は接岸傾向となる。
- ・都井岬沖では8月に小蛇行が形成され離岸傾向となる。10月には接岸傾向となるが、11月に再び離岸傾向となる。
- ・足摺岬沖～潮岬沖では、接岸傾向であるが、都井岬沖の小蛇行が9～10月に四国沖を東進するのに伴い離岸し、その後は接岸傾向となる。

##### ◎潮岬以東

- ・8月以降はN型基調で推移する。小蛇行の東進に伴い、8月、10～11月にB・C型になるときがある。
- ・野島埼沖では、流路変動に伴い離接岸がみられる。

#### (2) 薩南～房総沿岸域

- ・潮岬以西では、黒潮の離接岸に伴って沿岸域へ一時的に暖水が波及することがある。
- ・潮岬以東では、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、概ね冷水域に入る。黒潮流路の変動に伴い、内側域への一時的な暖水波及がある。
- ・伊豆諸島南部海域は、概ね黒潮より南の暖水域に入る。黒潮流路の変動に伴い、冷水域に入ることがある。

#### (3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・沿岸域へ一時的に暖水や冷水が波及することがある。

#### (4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は「平年並み」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、「平年並み」～「やや低め」で推移する。暖水波及時には「高め」となる。
- ・伊豆諸島南部海域は、「平年並み」～「高め」で推移する。黒潮流路の変動に伴い、「低め」となることがある。
- ・鹿島灘～常磐南部海域は、「平年並み」～「低め」で推移する。ただし、冷水や暖水波及時には大きく変化する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、

（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

## 経過 (2010年4月～7月) (注：経過は図2を参照のこと。)

### (1) 黒潮

- ・4月上旬、N型流路からB型流路となった。
- ・4月下旬、伊豆諸島に冷水域を持つC型流路となった。
- ・5月中旬、冷水域は伊豆諸島から房総沖に移動した。
- ・5月下旬、冷水域はさらに東へと流去し、以降はN型流路で推移している。

### (2) 薩南～房総沿岸域

#### ◎薩南海域

- ・4月、黒潮北縁は接岸傾向で推移した。
- ・5～6月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。
- ・7月上旬、黒潮北縁は離岸傾向で推移した。
- ・7月中旬、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置～やや接岸傾向で推移した。

#### ◎潮岬以西

- ・5月中旬～6月上旬、都井岬沖で小蛇行が形成された。
- ・4～7月、足摺岬～潮岬では概ね接岸傾向であるが、6月上旬以降、小蛇行の東進に伴い離岸が見られた。

#### ◎潮岬以東

- ・4月上旬～中旬、熊野灘～遠州灘は概ね冷水域に入った。
- ・4月下旬～5月上旬、八丈島は一時的に冷水域に入った。
- ・4月下旬、大島東水道から相模湾に黒潮より暖水が波及した。
- ・5月上旬に、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は概ね冷水域に入った。
- ・5月下旬、遠州灘～伊豆諸島北部海域に暖水波及が見られた。
- ・6月上旬、遠州灘で暖水波及が見られ、6月中旬には熊野灘に暖水が移動した。
- ・野島崎沖では、黒潮が4月上旬に離岸、4月中旬～下旬に接岸、5月に離岸し、6月以降は平年並みで推移した。

### (3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・4月、親潮系冷水が広く分布した。
- ・5月上旬、常磐南部海域は親潮系冷水が、鹿島灘海域は黒潮系暖水が分布した。
- ・5月下旬～6月上旬、黒潮系暖水が広く分布した。
- ・6月下旬、北から冷水が断続的に流入した。

## 現況 (2010年7月21日現在)

### (1) 黒潮

- ・ N型流路で推移している。

### (2) 薩南～房総沿岸域

#### ◎ 薩南海域

- ・ 黒潮北縁は接岸傾向にある。

#### ◎ 潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬で「かなり離岸」している。
- ・ 黒潮は、足摺岬～室戸岬で概ね「接岸」している。
- ・ 黒潮は、潮岬で「やや離岸」している。

#### ◎ 潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域に暖水が波及している。
- ・ 伊豆諸島南部海域は、黒潮より南の暖水域に入っている。
- ・ 房総沖で黒潮は東北東に流れ、犬吠埼沖で離岸している。

### (3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 海面水温は気温とともに上昇し、下層との間に躍層を形成している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

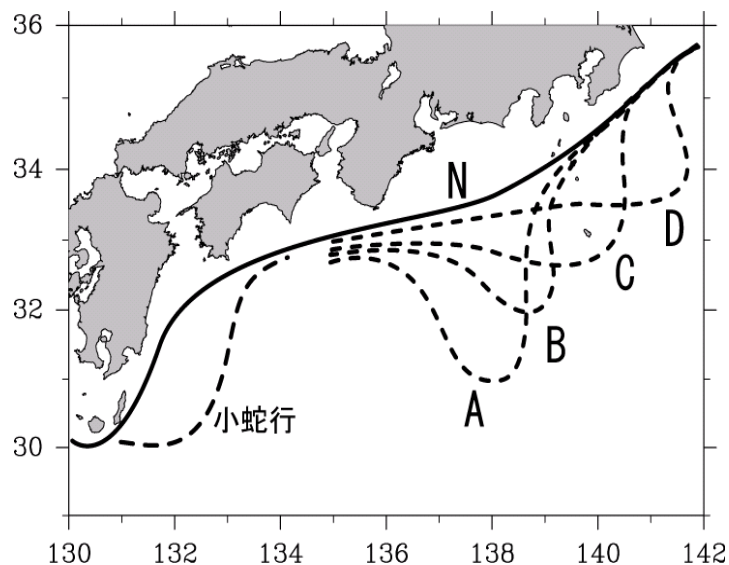


図1 黒潮流型の分類

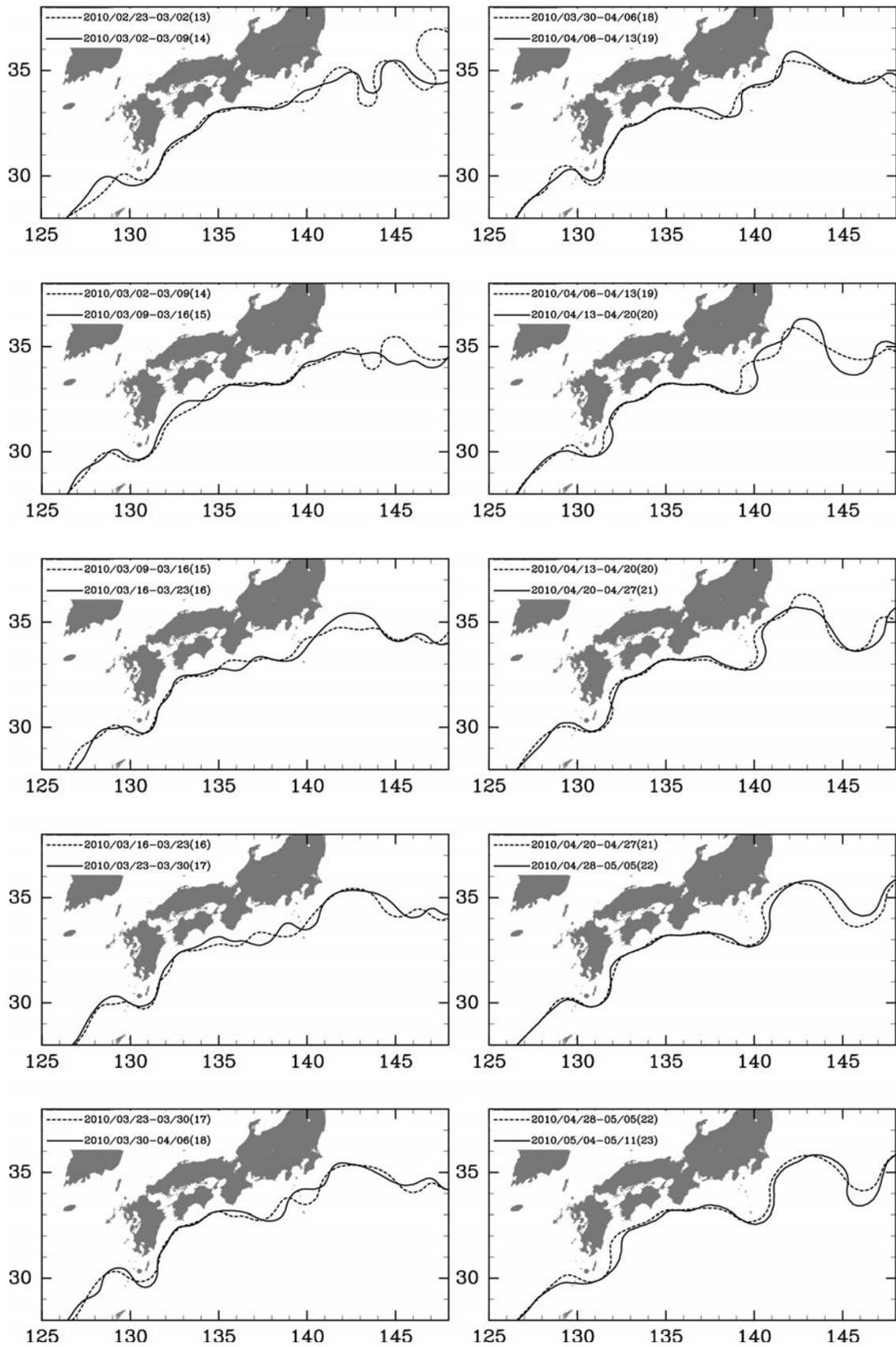


図 2a 黒潮流軸のパターン

(2010年3月～7月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

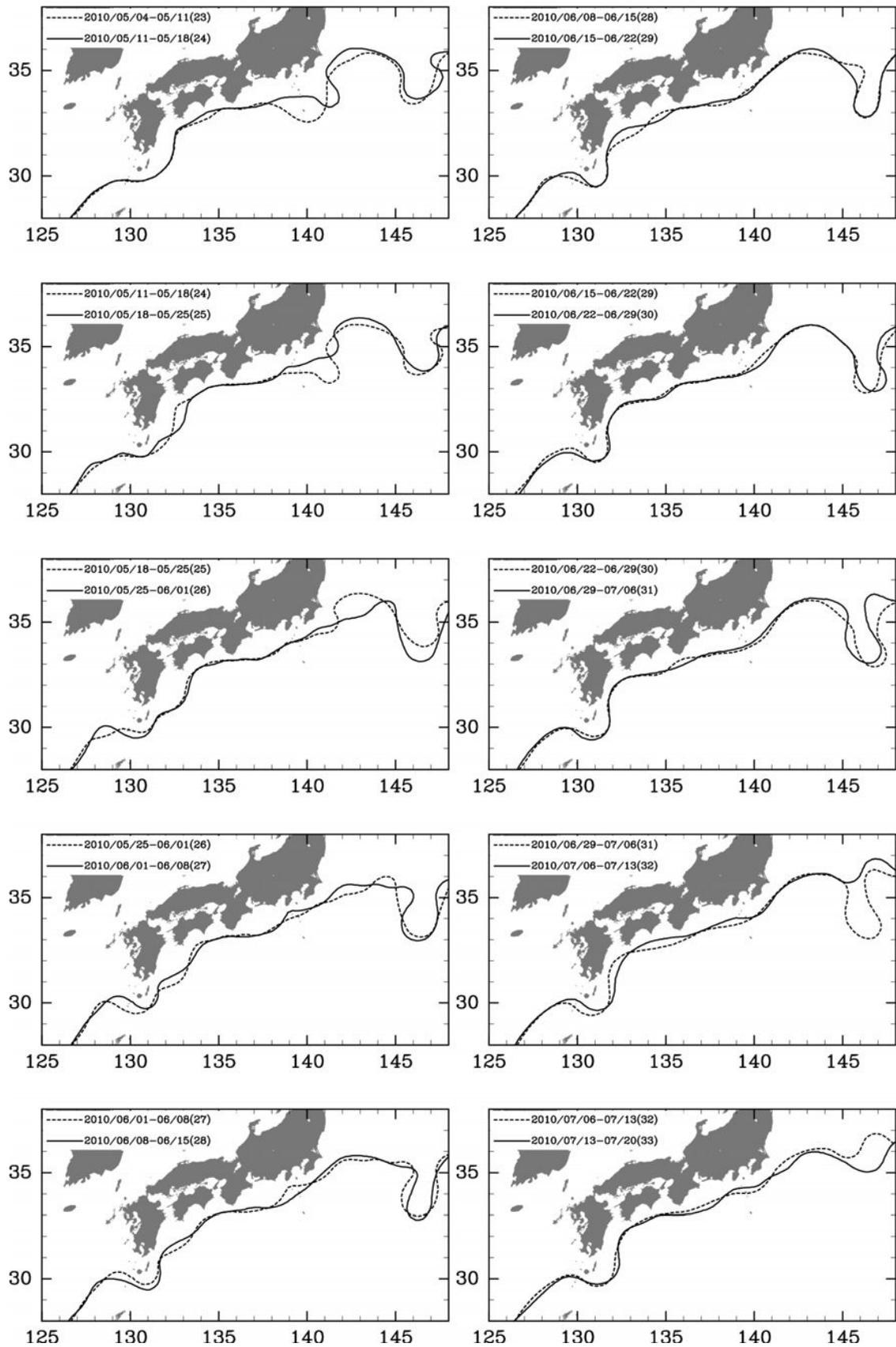


図 2b 黒潮流軸のパターン

(2010年3月～7月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

## マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

### 今後の見通し（2010（平成22）年8月～12月）

対象海域：薩南～豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい

対象魚群：0歳魚（2010（平成22）年級群）、1歳魚（2009（平成21）年級群）、2歳魚（2008（平成20）年級群）、3歳魚（2007（平成19）年級群）、4歳魚（2006（平成18）年級群）以上。魚体の大きさは尾又長で表示。年初に加齢。

#### 1. 薩南～豊後水道（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は薩南海域では前年を上回り、豊後水道では前年並～上回る。1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚以上は少ない。サバ類全体としては前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは混獲程度、ゴマサバが主な漁獲対象となる。薩南海域では31cm以下（0、1歳魚）主体。日向灘～豊後水道では25～30cm前後（1歳魚）主体に20～25cm（0歳魚）が混じる。

#### 2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低調だった前年を上回る。ゴマサバ0歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚以上は少ない。サバ類全体としては前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、25～40cm（3、1歳魚中心）が主体。

#### 3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚はきわめて多かった前年を下回る。1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚以上は少ない。サバ類全体としては高水準であった前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、33cm以上（3歳魚）と25～31cm（1歳魚）が主体に期後半には25cm以下（0歳魚）が混じる。

#### 4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年並。1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚以上は少ない。ゴマサバとしては高水準であった前年並。サバ類全体としては前年並。

(2) 漁期・漁場：ゴマサバは期を通じて三宅島周辺海域を中心に漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、26～30cm（1歳魚）主体で25cm以下（0歳魚）も漁獲される。

#### 5. 犬吠～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ0歳魚は前年並か下回る。1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚以上は前年を下回る。マサバは前年並か上回る。ゴマサバは前年を上回る。サバ類全体としては前年並か上回る。

(2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網はマサバ主体で、8月は三陸北部海域で漁場が形成される。9月は金華山周辺でも漁場が形成され、10月には常磐～三陸海域に漁場が広がる。11月は犬吠～三陸海域で、主な漁場は常磐以南となる。12月は犬吠～常磐海域に漁場が形成され、犬吠海域が主漁場となる。

(3) 魚体：マサバは25～32cm（1歳魚）が主体となり、これに32～38cm（3歳魚）が混じる。期後半に25cm以下の0歳魚が漁獲される。ゴマサバは28cm前後（1歳魚）と35cm前後（3歳魚）主体にマサバに混獲される。

## 漁況の経過（2010年1～7月）および今後の見通し（2010年8～12月）についての説明

### 1. 資源状態

#### 1) マサバ

資源量は1990年以降低い水準にあるが、加入量水準の高い2004年級群、2007年級群の発生により資源量が増加した。

2005年級以上（5歳魚以上）は、加入尾数が多かった2004年級群は3歳時まで漁獲の主体を占めたが、4歳、5歳時の漁獲尾数は減少しており、残存資源尾数は少ないと考えられる。2004年級群以外の年級群は年級豊度が低く、残存資源は少ない。

2006年級群（4歳魚）は、7月時点の資源評価（コホート解析）では、推定加入尾数が4.7億尾と少なく、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、残存資源尾数は少ない。

2007年級群（3歳魚）は推定加入尾数21億尾と近年では2004年級群に次ぐ高い水準と推定された。2009年7～12月は北部海域まき網漁業の漁獲の主体となった。2010年1～6月は伊豆諸島海域以西の各漁業で漁獲の主体となった。

2008年級群（2歳魚）は、推定加入尾数4.1億尾であり加入量水準は低いと考えられる。茨城水試による2008年級群の未成魚越冬群指数は283と、2007年級群の1727を大きく下回った。発生後の各調査船調査結果や漁況の経過からみても、資源量は低いと考えられる。

2009年級群（1歳魚）の推定加入尾数は21億尾と、2007年級群と同等の比較的高い水準と推定された。2009年11月から北部まき網の漁獲対象となり、茨城水試による未成魚越冬群指数は932と、2007年級群に次ぐ水準となった。2010年2月以降の常磐海域まき網漁況はとくに3月は漁場形成がみられず低調であったが、これは常磐海域の水温が低く、例年は1歳魚があまり分布しない伊豆諸島以西海域で漁獲がみられたことから、例年より分布域が南偏していたためと考えられる。2010年6月下旬に行われた三陸～道東沖の流し網調査（釧路水試）においても2009年級群のまとまった漁獲がみられており、本予測期間の主体となると考えられる。

2010年級群（0歳魚）は、移行域幼稚魚調査（中央水研）による加入量指数は5.6と過去15年間の同調査で上位4番目であり、2009年（5.8）、2004年（5.6）と同等の高い値となった。北西太平洋北上期中層トロール調査（西部北太平洋サンマ資源調査（東北水研）、北上期浮魚類調査（中央水研））による親潮～移行域における推定現存量は14億尾（暫定値）で過去10年間の同調査で上位6番目であり、2009年（23億尾）を下回った。同調査漁獲物による7月時点での推定平均体長は加入豊度と相関が高いが、2010年は16.9cmと2007年（16.4cm）と同程度であり、2004年（19.3cm）、2009年（18.4cm）に次ぐ大きさであった。推定平均体長からの回帰式によって推定される加入尾数は17.5億尾であった。現時点での0歳魚の加入量水準の見積もりは不確実であるが、2009年級群に次ぐ比較的高い水準と見込まれる。

#### 2) ゴマサバ

資源量は1990年代後半以降高い水準にある。0歳時に移行域を回遊して加入する群が資源の主な部分を占めるようになっている。

2006年級群（4歳魚）は、7月時点の資源評価（コホート解析）では、加入尾数が近年の平均を下回る6.4億尾と推定され、これまでの漁況経過や調査船調査結果から残存資源量は少ない。

2007年級群（3歳魚）は、加入尾数が11億尾と近年の平均を上回る加入豊度と推定され、これまでの各地漁業で漁獲物の主体となっている。

2008年級群（2歳魚）は、加入尾数が4.2億尾と推定され、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、資源量は少ない。

2009年級群（1歳魚）は、7月までの各地漁業の漁獲状況では、2008年級群の同期を大きく上回っている。静岡県棒受網CPUEによる加入量指数（静岡水技研）は55.0（6月までの暫定値）であり、2007年級群（51.3）、2008年級群（14.2）を上回った。調査船調査では、春季の稚幼魚期から夏秋季の索餌期、越冬期といずれも多く出現した。最近年のため推定値の不確実性が高いが、加入尾数は高い水準である14億尾と推定される。

2010年級群（0歳魚）は、定置網などの各地漁業で漁獲され始めている。調査船調査では、移行域幼稚魚調査による加入量指数は5.5で過去15年間の同調査で上位9番目であり、2007年（6.1）、2009年（7.0）を下回ったものの、2008年（2.4）を大きく上回った。北西太平洋北上期中層トロール調査による親潮～移行域における推定現存量は14億尾（暫定値）で過去10年間の同調査で上位6番目であり、2007年（53億尾）、2008年（21億尾）、2009年（166億尾）を下回った。しかしながら、同調査漁獲物による7月時点での推定平均体長は加入量と相関が高いが、2010年は18.0cmと2009年（20.1cm）、2004年（19.9cm）に次ぐ大きさであった。これらの調査の資源量指標値から回帰式によって推定される加入尾数は12億尾であり、現時点での0歳魚の加入量水準の見積もりは不確実であるが、加入量水準は近年の平均を上回ると見込まれる。

## 2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

### 1) マサバ

#### (1) 来遊量

資源状態に記したとおり、0歳魚（2010年級群）の加入量水準は、情報が限られており不確実ではあるが2007年級群、2009年級群に次ぐ比較的高い水準を見込む。1歳魚（2009年級群）の加入量水準は2007年級群に次ぐ水準と考えられ、本予測期間の来遊量は少なかった前年を上回ると考えられる。2歳魚（2008年級群）は加入量水準が低く、来遊量は多かった前年を下回る。3歳魚（2007年級群）は2010年1～6月の伊豆諸島海域以西の各漁業の漁獲の主体となっており、本予測期間における来遊量は少なかった前年を上回る。4歳魚（2006年級群）以上は残存資源が少なく来遊量は前年を下回る。

以上のことから本予測期間は1歳魚（2009年級群）が主体となり、3歳魚（2007年級群）も漁獲され、2歳魚（2008年級群）はこれに混じる。期後半には0歳魚（2010年級群）が漁獲されると考えられる。マサバ全体としては前年並か上回ると考えられる。

#### (2) 漁期・漁場

常盤海域から犬吠周辺におけるまき網による1～6月のサバ類水揚量は43.3千トンと、前年同期（35.5千トン）を上回った。伊豆諸島海域における、たもすくい・棒受網漁業（千葉県、神奈川県、静岡県船）の1～6月のマサバ水揚量は952トンと、前年同期（1,088トン）を下回った。静岡県および三重県のまき網によるマサバ水揚量は4.3千トンと前年同期（2.5千トン）を大きく上回った。和歌山～宮崎県の1～6月のマサバ水揚量は1.2千トンと前年同期（1.4千トン）を下回った。

今漁期は、常盤海域以北ではまき網・定置網での漁獲が中心となる。2010年6月以降のまき網漁場は常盤北部～三陸南部海域にみられ、7月現在三陸沿岸定置網への入網がみられている。8～9月には三陸北部海域を中心に漁場が形成され、漁場の移動は前年と同様の経過をたどると考えられる。道東海域では、2010年6月下旬に行われた三陸～道東沖の流し網調査（釧路水試）で魚群の分布が認められており、漁場水温が17℃前後と好適な条件になれば、一時的に漁場が形成される可能性がある。

熊野灘～伊豆諸島海域では、本予測期間のマサバの来遊は少ない。紀伊水道外域への来遊量は低調であった前年を上回るものの低水準である。薩南～豊後水道では1～6月の漁況からみて前年並の低い水準で推移すると考えられる。

### (3) 魚体

常磐から犬吠周辺のまき網では、1～2月は19～26cm(モード23cm)の1歳魚と29～37cm(モード32cm)の2、3歳魚が漁獲された。3月はほとんど漁獲がなく、4月は21～28cm(モード24cm)の1歳魚に、30～35cmの2歳魚、3歳魚が漁獲された。5～6月は25～29cmとやや大型の1歳魚が主体となり、30～39cmの2歳魚、3歳魚も漁獲された。産卵場である伊豆諸島海域では、1月は33～44cm(モード38cm)と、3歳魚主体に4歳魚以上が混じった。2～3月は30～40cmと3歳魚中心に2歳魚、4歳魚が混じった。4～5月はこれに24～29cmの1歳魚が混じった。6月は33～43cmの幅広い組成となった。駿河湾～熊野灘のまき網では、伊豆諸島海域とほぼ同様の組成に加え、28cm以下の1歳魚が期を通じて混じった。

これまでの年齢査定結果や尾叉長組成の推移などから、関東以北における本予測期間の年齢別尾叉長は、1歳魚25～32cm、2歳魚29～34cm、3歳魚32～38cm、4歳魚以上は35cm以上と考えられ、期後半に出現する0歳魚は例年の傾向から19～25cmと予測される。年齢査定結果によると各年級群の尾叉長の範囲は広く重なり合っており、厳密な区分は困難である。

## 2) ゴマサバ

### (1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0歳魚(2010年級群)はこれまで得られている情報から近年の平均を上回る加入量水準とみられ、来遊量は、熊野灘ではきわめて多かった前年を下回るが、多くの海域で前年並～上回る。1歳魚(2009年級群)は高い加入量水準と推定され、前年を上回る。2歳魚(2008年級群)は近年の最低水準の加入量と推定され、来遊量は前年を下回る。3歳魚(2007年級群)は近年の平均的な水準を上回る加入量と推定され、前期までの漁獲の主対象となっており、来遊量は前年を上回る。4歳魚(2006年級群)は残存資源量が少なく、来遊量は前年を下回る。全体の来遊量は前年を上回る。

### (2) 漁期・漁場、魚体

1～6月のゴマサバ漁況は、前年を上回る海域が多かった。薩南海域では3歳魚以上を主体に前年、平年を大きく下回った。日向灘～豊後水道では1、3歳魚主体に前年、平年を上回った。宿毛湾は1歳魚主体に前年、平年を大きく上回った。紀伊水道は前年を下回った。熊野灘は3、1歳魚主体に1～3月は前年を下回り低調であったが4～6月は好調となって前年を上回った。伊豆諸島周辺海域では主に三宅島周辺海域のほか利島など北部海域も漁場となり3、1歳魚主体に前年を上回った。犬吠～常磐海域のまき網では1歳魚主体でマサバに混獲され、漁獲量は前年を上回った。

1～6月の漁獲量(全漁業)は、薩南海域～紀伊水道外域は21.2千トン(前年同期実績16.0千トン)、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は25.4千トン(同22.7千トン)、犬吠以北海域は8.7千トン(同6.2千トン)であった(漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値)。

各地の漁期・漁場と魚体は、薩南海域では0、1歳魚が主体、日向灘～豊後水道では1歳魚主体に0歳魚が混じり、紀伊水道～熊野灘では3、1歳魚主体に0歳魚が混じり、それぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、近年の主漁場である三宅島周辺海域を中心に1歳魚主体に0歳魚が混じり、期を通じて漁場が形成される。犬吠以北海域では1、3歳魚がマサバに混獲される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次の通りである。0歳魚

(2010年級群) : 30cm以下で20～25cm主体、1歳魚(2009年級群) : 25～30cm前後、2歳魚(2008年級群) : 30～35cm、3歳魚(2007年級群)以上 : 33cm以上。

## マアジ太平洋系群の漁況予報

### 今後の見通し(2010(平成 22)年 8 月～12 月)

対象海域:北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業:まき網、定置網

対象魚群:0 歳魚(2010(平成 22)年級群)、1 歳魚(2009(平成 21)年級群)、2 歳(2008(平成 20)年級群)以上。年  
初に加齢。魚体は尾叉長。

#### 1.北薩～土佐湾(まき網、定置網)

(1)来遊量:北薩～薩南海域では 0 歳魚と 1 歳魚が主体で前年並。日向灘では 0 歳魚主体で前年を下回る。豊後水道南部西側では 0 歳魚主体で前年並の低水準。豊後水道東側並びに土佐湾では、0 歳魚と 1 歳魚が主体で前年を下回る。

(2)魚体:0 歳魚は 19cm 以下、1 歳魚は 19～25cm、2 歳魚は 25cm 以上。

#### 2.紀伊水道外域～熊野灘(まき網、定置網)

(1)来遊量:紀伊水道外域西部では 0 歳魚主体に前年を下回り、東部では 2 歳魚の来遊は期待できるものの、1 歳魚は前年を下回る。熊野灘では 1 歳魚、0 歳魚とも前年並の低水準。

(2)魚体:紀伊水道外域東部で来遊の期待される 2 歳魚は 25～27cm で、3 歳魚は 27～30cm。熊野灘で漁獲の主体となる 1 歳魚は 21～25cm で、10 月以降加わる 0 歳魚は 14～18cm。

#### 3.相模湾(定置網)

(1)来遊量:0 歳魚主体に 1 歳魚も混じり、前年並か下回る。

(2)魚体:0 歳魚は 14～18cm、8 月までこれに混じる 1 歳魚は 20～24cm。

### 漁況の経過(2010 年 4 月～6 月)および見通し(2010 年 8 月～12 月)についての説明

#### 1.資源状態:

資源量は 1986 年以降増加し、1990 年代半ばは 15 万トンから 16 万トンと高位水準で推移したが 1997 年からは減少に転じ、2001 年に増加したものの 2005 年以降は減少が続いている。現在の資源量は 10 万トンを下回っており、水準としては中位、近年(5 年間)における動向は減少傾向にある。

2008 年級群(2 歳魚)は、今期において紀伊水道外域東部で漁獲対象となることが予測されるが、当該海域並びに全体として、残存資源量は少なくなっているものと考えられる。

2009 年級群(1 歳魚)は、今期も 0 歳魚に混じって漁獲対象となることが予測されるが、予報対象海域における今年 1～6 月の漁獲尾数は、近年の同期と比して低水準であったことから、年級群豊度としては高くないことが推察される。

2010 年級群(0 歳魚)は、今期の漁獲の主体になると考えられるが、加入量水準の指標と考えられる今年 4～6 月の日向灘南部定置網への 0 歳魚入網量(宮崎水試)は、前年の約半分にとどまった。他海域においても、0 歳魚漁獲は低調であることから、加入量水準は近年の年級群に比して低いと推察される。

#### 2.来遊量、漁期・漁場:

来遊量については各海域ごとに、前期における 0 歳魚並びに 1 歳魚の漁獲状況等に基づき予測した。紀伊水道外域東部では 2 歳魚が漁獲の主体になると予測されることから、黒潮の潮岬沖での接岸との関係から予測した。なお多くの海域で、マアジは予測期間中を通じて漁獲対象になると考えられる。

### (1)北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、0 歳魚の来遊量水準は、6 月までの定置網やまき網による混獲状況から、前年並と予測される。1 歳魚は、これまでの漁況から前年を上回ると考えられる。全体としては前年並と予測される。

日向灘では、0 歳魚漁況の予測根拠となる「南部の定置網における4～6月のアジ仔漁獲量」並びに「宇和海南部の当歳魚漁況(愛媛県)」がいずれも低調であることから、前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0 歳魚の定置網(標本船)への入網が前年より多く推移したものの、これまでの漁況から、前年並と予測される。

豊後水道東部では、今期の予測根拠となる4～6月の宇和海中南部まき網漁況が低調であったことから、前年を下回ると見込まれる。

土佐湾では、前期の漁況から0 歳魚、1 歳魚ともに来遊量水準は低いと考えられ、前年を下回ると予測される。

### (2)紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、1～6月における標本漁協での漁獲量が0 歳魚主体に前年同期を下回ったことから、前年を下回ると予測する。

紀伊水道外域東部では、予測期間中は潮岬沖の黒潮が一時的に離岸するものの接岸基調で推移するので、2 歳魚の来遊が期待できる。しかし、前期の漁況から1 歳魚は少ないと考えられるので、全体としては前年を下回り低調になると予測される。

熊野灘では、1 歳魚漁況の予測根拠となる中型まき網による1～6月の漁獲量が低調であったことから、今期も低水準と予測される。定置網での0 歳魚漁況も低調であり、11～12月に中型まき網の対象になることは期待できない。以上のことから、1 歳魚、0 歳魚とも前年並の低水準に留まると予測される。

### (3)相模湾

0 歳魚漁況の予測根拠となる1～6月のじんだ銘柄漁獲量は、前年を上回ったが、近年を下回った。1 歳魚の漁況は1～6月にかけて不振であった。以上のことから前年並か下回ると予測される。

## マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2010(平成22)年8~12月)

対象海域：北薩～三陸, 道東

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2010(平成22)年級群)、1歳魚(2009(平成21)年級群)、2歳魚(2008(平成20)年級群)、3歳魚(2007(平成19)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

### 1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：紀伊水道外域以西では主に0歳魚を漁獲対象とし、前年並あるいはそれを下回る。熊野灘北部では0、1歳魚を主体に2歳魚が若干混じり、前年並。

(2) 漁期・漁場：期を通じて。

(3) 魚体：紀伊水道外域以西では12~18cmの0歳魚主体に一部1歳魚混じり。熊野灘北部沿岸では1歳魚(18~21cm)と0歳魚(12~17cm)を主体に若干2歳魚以上(22cm以上)が混ざる。

### 2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：0歳魚については、伊勢・三河湾は前年を上回るが、相模湾では低調だった前年並。駿河湾及び伊豆半島寄りの相模湾では2歳魚を主体に1歳魚混じりで前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて散発的に漁場形成。

(3) 魚体：伊勢・三河湾, 相模湾においては体長16cm以下の0歳魚が主体。駿河湾においては19~22cmの2歳魚を主体に16~20cm程度の1歳魚混じり。

### 3. 房総～三陸, 道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：1、2歳魚を主体に前年並あるいはそれを上回る。12月以降漁獲対象となる0歳魚は、現時点では不確実。

(2) 漁期・漁場：8月までは房総～金華山沖で1、2歳魚を対象に漁場形成。その後は散発的。12月以降、常磐南部～房総海域で0歳魚がカタクテイワシに混獲。三陸～仙台湾の定置網では1、2歳魚主体で期を通じて漁獲。道東海域での漁場形成はない。

(3) 魚体：18~20cmの1歳魚と20~22cmの2歳魚を主体に、23cm以上の3歳魚以上の個体加わる。12月以降漁獲対象となる0歳魚は12~13cm。

漁況の経過(2010年4~6月)及び見通し(2010年8~12月)についての説明

### 1. 資源状態：

マイワシ太平洋系群の資源量は1994年に100万トンを下回り、その後1999年までは70万~90万トン台で推移し、その後再び減少傾向となった。2002年以降は20万トン未満の低水準で推移していたが、近年は増加傾向がみられる。

2007年級群は、0歳魚時点で実施された調査船調査結果(2007年5月：移行域幼稚魚調査(中央水研)、同年6~7月：北西太平洋サンマ資源調査(東北水研))では高豊度が示唆されながら、翌2008年以降の諸調査結果(2008年2月：越冬期浮魚類現存量推定調査(中央水研)、同年6~7月：北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)、同年9~10月：秋季北西太平洋浮魚資源調査(東北水研)、同年6~9月：表層流し網調査(釧路水試))ならびに現在までの漁況が低調に推移してきたことから、年級豊度は低いと判断された。

2008年級群の0歳魚時点での諸調査結果(2008年5月：移行域幼稚魚調査(中央水研)、同年6~7月：北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)、同年6~7月：表層流し網調査(釧路水試)、同年9~10月：秋季北西太平洋浮魚資源調査(中央水研))は、2008年9月に実施された表層流し網調査結果(釧路水試)を除いて、いずれも同年級群が低豊度であることを示唆した。また実際の0歳魚時点での漁況も、伊勢・三河湾、相模湾を除くいずれの海域においても低調に推移したことから、当初2008年級群の豊度は依然低水準に留まるものと考えていた。しかし、年明け1歳となった

後の「未成魚越冬群指数（千葉水総研）」では、2008年級群の指数は1.46と、このところ2年続けて1を割り込んだ2006（0.59）、2007（0.61）両年級群を上回り、2002年級群以降で最も高い年級豊度を示した2005年級群（1.74）を若干下回る程度の高い値を示した。2009年3～4月の熊野灘、同年4月以降の駿河湾・相模湾、6～8月の常磐～房総海域における漁獲状況も好調に推移した。さらに調査船調査においても、2009年6～7月に行われた北西太平洋サンマ資源調査（東北水研）では、1歳魚以上のマイワシ推定現存量は2004年以来となる千万尾単位の現存量推定値となり

（3.2千万尾）、同時期に実施された表層流し網調査（釧路水試）では、前年秋季（2008年9月）の調査結果に引き続いて高いCPUE値を示すなど、1歳以降になって、漁業や調査で多く捉えられるようになった。本年漁期においても2歳魚として漁獲物に継続して出現しており、その豊度を上方修正する結果となった。

2009年級群の0歳魚時点での諸調査結果の多く（2009年5月：移行域幼稚魚調査（中央水研）、同年6～7月：北西太平洋サンマ資源調査（東北水研）、同年9～10月：秋季北西太平洋浮魚資源調査（中央水研））は、2009年6～9月に実施された表層流し網調査結果（釧路水試）を除いて、いずれも同年級群が高豊度であることを示唆する結果となった。一方、漁業における2009年級群の出現状況は、同年級群が0歳魚であった2009年漁期中こそ低調に推移したものの、年明け1歳となった後の「未成魚越冬群指数（千葉水総研）」は1.24と2008年級群をわずかに下回る値を示し、また2010年6月以降現在まで2008年級群2歳魚と共に漁獲物の主体を占め、2008年級群に連続して近年では比較的高い年級豊度である可能性が示唆された。

2010年産卵期（前年10月～6月）の産卵量は73兆粒で、前年同期の116兆粒を下回った。一方、2010年6月の移行域幼稚魚調査（中央水研）に基づく加入量指数は1213.1で、前年の38.2を大きく上回り、本調査が開始された1996年以降で最大の値となった。また6～7月の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研）によるマイワシ0歳魚の混獲状況から計算した現存量推定値（78億尾）も、前年の4.9億尾を一桁上回り、2001年の調査開始以来初の十億尾単位での推定値が算出された。このように現時点で得られている仔稚魚期以降を対象とした調査船調査の結果は、いずれも0歳魚（2010年級群）の加入量水準がこれまでになく高い可能性を示唆している。しかしながら、近年は0歳魚段階での調査船調査の結果がその直後の漁況や、それによって算出される年級豊度の多寡とは対応しないことも多い。2010年級群の豊度については、今後の0歳魚以降の漁獲状況、秋季北西太平洋浮魚資源調査（中央水研）、未成魚越冬群指数（千葉水総研）ならびに越冬期浮魚類現存量推定調査（中央水研）等の結果に基づいて判断することとなる。

## 2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

### (1) 北薩～熊野灘

来遊量：前期において、薩南海域～熊野灘にかけての漁況は、高知県の定置網や紀伊水道外域西部を除いて極めて低調に推移した。熊野灘南部ならびに紀伊水道以南海域において今季漁獲の主体となるのは0歳魚（2010年級）であるが、前期の漁況経過の低迷やマシラスの混獲率の低さから考えて、今季の漁獲は前年並あるいはそれ以下の低水準に留まると予想された。一方、熊野灘北部における4～6月の中型まき網による漁獲は、1歳魚（2009年級群）を主体に2歳魚（2008年級群）混じりで、量的には前年を下回ったものの同期の10年平均を上回った。これらのことから、熊野灘北部については、0.1歳魚双方を漁獲対象として、前年並の水準で推移すると考えられる。

漁期・漁場：期を通じて漁場となる。

魚体：熊野灘南部及びそれ以西の海域では、体長12～18cm程度の0歳魚を主体に一部1歳魚混じり。熊野灘北部沿岸では18～21cmの1歳魚と12～17cmの0歳魚を主体に、22cm以上の2歳魚及び高齢魚が若干混ざると予測される。

### (2) 伊勢・三河湾～相模湾

来遊量：前期の伊勢・三河湾及び遠州灘～駿河湾におけるマシラス漁況は、低調であった前年同期の漁獲量を上回り、過去10年平均（伊勢・三河湾）あるいは過去5年平均（遠州灘～駿河湾）並あるいはそれを下回る程度で推移した。また相模湾におけるシラス船曳網標本船による漁獲は前年の9割程度で過去5年平均の5割程度に留まった。これらマシラスの漁況はその後の0歳魚ヒラ

ゴ・中羽イワシの漁況を予測する上での参考値となる。0歳魚が漁獲の主体を成す伊勢・三河湾においては今後の漁獲は2010年級群を対象に前年を上回り平年並、同じく0歳魚のヒラゴ・中羽イワシが漁獲の主体となる相模湾においては前年並の低調な漁獲が予想される。

一方、駿河湾ならびに伊豆半島寄りの相模湾においてマイワシを対象とする主たる漁業種類はまき網であるが、その漁獲対象は1歳魚以上の未成魚・成魚であり、0歳魚はまき網の対象とならない。前期の駿河湾におけるまき網の漁獲量は、2歳魚（2008年級群）を主体に平年を上回り前年並、伊豆半島寄りの相模湾のまき網と定置網の漁獲量合計値は前年ならびに過去5年平均を大幅に上回り、漁獲物は1歳魚（2009年級群）と2歳魚（2008年級群）で構成された。今漁期も引き続き2歳魚を主体に1歳魚が混じる形で漁獲が継続されると予想され、その量は近年の中では高水準に当たるが、前年を下回ることが予想される。

漁期・漁場：期を通じて散発的に漁場が形成されると考えられる。

魚体：伊勢・三河湾ならびに相模湾においては、体長16cm以下の0歳魚が漁獲の主体となる。一方、駿河湾においては19～22cmの2歳魚を主体に16～20cm程度の1歳魚混じり。

### (3) 房総～三陸、道東(まき網、定置網)

来遊量：前期の漁況は1歳魚（2009年級群）及び2歳魚（2008年級群）を主体として前年並に推移した。特に6月以降に常磐南部～房総海域におけるまき網の漁獲は、現在に至るまで好漁を維持している。これらの漁獲の主体は、近年では比較的豊度の高い2008年級群と2009年級群であり、今期の来遊量は、これら1、2歳魚を主体として前年並あるいは上回ると考えられる。12月以降漁獲対象となる0歳魚は、これまでの調査船調査結果などからみる限りでは例年よりも加入量水準が高いことが期待されるものの、「資源状態」のところで前述したように、調査船調査で捉えた0歳魚の豊度の指標値が、その後の漁況（特に0、1歳魚段階）とは必ずしも一致しない場合があることを考えると、漁期後半に加入して来るであろう0歳魚段階での漁獲水準を現段階で予測することは難しい。今後引き続き実施される諸調査の結果等を参考にしつつ、注視する必要がある。

漁期・漁場：前期1～5月にかけての漁獲は散発的であったが、6月以降常磐～房総周辺海域にまき網漁場が形成され、漁況は現在まで好調に推移している。最近年におけるまき網漁場形成の傾向から、8月までは房総～金華山沖において漁場が形成され、その後散発的となる。12月以降、常磐南部～房総海域において0歳魚がカタクチイワシに混獲される。また、三陸～仙台湾にかけての定置網においても1、2歳魚主体で期を通じて漁獲される。

道東海域は、まき網の操業があったとしても、漁獲の主対象とはならない。ただし、釧路水試が実施している漁獲試験において2008年秋季以降2008年級群が継続して漁獲されており、その漁獲尾数やCPUEは2000年以降で最高の値にあることから、道東海域への来遊量は前年を上回ると予想される。

魚体：前期は体長19～22cmの2歳魚と16～20cmの1歳魚が共に漁獲の主体を成した。今期の1歳魚は18～20cm、2歳魚は20～22cmで漁獲され、これに3歳魚以上の個体が23cm以上で加わると予測される。晩秋以降にカタクチイワシの混獲物として漁獲対象に加わる0歳魚は、過去の傾向から12～13cmで出現すると考えられる。

## カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し (2010(平成22)年8月~12月)

対象海域：北薩~三陸、道東

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2010(平成22)年級群)、1歳魚(2009(平成21)年級群)、および2歳魚(2008(平成20)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

### 1. 西薩~常磐のシラス(船曳網)

(1) 来遊量：全体としては前年を下回る。西薩・志布志では前年並。伊勢湾~渥美外海では不漁の前年並。遠州灘~相模湾では前年を下回る。鹿島灘~常磐では前年並。

(2) 漁期：全期間。

### 2. 北薩~紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩・薩南では前年を上回る。日向灘では好漁の前年を下回る。豊後水道南部西側では前年並か下回る。豊後水道南部東側では前年を上回る。土佐湾から紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：10~13cmの1歳魚および9cm以下の0歳魚。

### 3. 伊勢・三河湾~相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：伊勢・三河湾~伊豆東岸では前年を下回る。相模湾では前年並か下回る。

(2) 漁期・漁場：全期間。

(3) 魚体：10~13cmの1歳魚および9cm以下の0歳魚。

### 4. 房総~三陸、道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：1 そうまき漁場は12月以降で常磐~犬吠埼周辺。道東のまき網は9~10月。仙台湾~三陸の定置網は全期間。常磐の小あぐり・房総沿岸の2 そうまきは全期間。

(3) 魚体：常磐・房総では0歳魚は8~12月に6~10cm台、1歳魚は12月で12~13cm台。三陸の定置網では12cm前後の1歳魚主体。

## 漁況の経過 (2010年4~6月) および見通し (2010年8~12月) についての説明

### 1. 資源状態：

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は1998年から2009年まで70万~150万トンで推移している。2009年の資源水準は過去30年で中位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布している。

2008年級群(2歳魚)は、2008年9~10月の秋季北西太平洋浮魚資源調査(中央水研)では近年の中でも0歳魚としては高い水準であった。西日本においてはシラスから0歳魚時まで概ね不漁であったが、伊勢・三河湾海域では2008年にシラスが好調で、秋季も同群から成長したと考えられる未成魚・成魚が好漁であった。本年級群により、2008年夏以降の九十九里での沿岸2 そうまきや秋季の八戸の小あぐり、2009年冬春季から夏季にかけての熊野灘、宿毛湾、豊後水道および日向灘において好漁がもたらされた。一方、常

磐・房総海域での2009年1～6月の漁獲量は1歳魚としては中漁程度であり、道東では2009年10月に前年を大きく上回る漁獲があったが漁場はごく沿岸に限られていた。2009年12月以降には体長12～13cm前後で常磐・房総海域に来遊し、熊野灘および日向灘のまき網でも漁獲対象となった。しかし、常磐・房総での漁況は前年を上回ったものの豊漁と言える水準ではなく、2010年2月の越冬期浮魚類現存量推定調査(中央水研)においても体長10cm以上の魚体の分布密度は前年を下回った。以上のように、2008年級群はシラスとして東日本で、未成魚・成魚として熊野灘以西で好漁をもたらしたものの、常磐・房総海域や道東における漁況は高水準と言えず、過去10年の中では中水準であったと考えられる。

2009年級群(1歳魚)は、シラスとして東日本で中漁から好漁であったが、西日本では不漁であった。2009年6～7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)における10cm未満の未成魚の推定分布量は前年より高く、2004年および2005年と同程度で、同調査における推定現存量としては中程度の水準であった。2009年9～10月の秋季北西太平洋浮魚資源調査(中央水研)での体長10cm以下のカタクチイワシの漁獲尾数は、前年の70%程度で9年間の調査における平均程度であった。0歳魚を主対象とする秋季の八戸の小あぐりは前年を下回り、九十九里海域の沿岸2そうまきは中漁程度で好漁の前年を下回った。また秋季における道東海域での0歳魚としての出現は近年の中では低水準であった。2009年12月以降の常磐・房総の1そうまき漁場では、漁獲物中に体長12cm以下の魚体が少なく、5～6月に12.0～12.5cm台で漁獲されているものの、1歳魚の来遊水準は低いと考えられる。以上の状況から、2009年級群は2008年級群を下回り、資源量としては過去10年の中で低水準であると考えられる。

2010年級群(0歳魚)に関しては、1～6月の本州太平洋岸における産卵量が4,736兆粒で、前年同期(5,434兆粒)を下回り、2001～2002年同期と同程度の水準であった。6月までのシラス漁は西薩・志布志を除き全般に好調とは言えない状況であった。2010年6～7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)における10cm未満の未成魚の推定分布量は前年の約半分、過去10年の調査の中で5番目の水準であった。以上のような現時点の情報で判断すれば、2010年級群は過去10年の中で中～低水準であると考えられる。

## 2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

### (1) 西薩～常磐のシラス(船曳網)

西薩・志布志では春漁(3～5月)が好調に推移したが6月以降不漁となったため、予測期間中は前年並と予測される。伊勢湾及び渥美外海では6月現在での内湾でのカタクチイワシの産卵水準が高くは無く、また春夏季の成魚の漁獲も少ないため、不漁の前年並と考えられる。遠州灘～駿河湾ではこれまでの漁獲状況から、前年を下回ると予測される。相模湾では卵の分布量から来遊量は平年(過去5年平均)並と考えられ、極めて好漁であった前年を下回ると推測される。鹿島灘～常磐南部では黒潮流路がC型・D型・N型の時に安定した漁となる傾向があり、海況の予測によればN型基調となることから、漁獲量としては中水準で前年並と予測される。全体としては、産卵量が前年を下回っていることや上半期のシラス漁況が不調であった海域が多かったことから、予測期間の来遊は前年を下回ると考えられる。

### (2) 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩・薩南海域では、北薩海域のまき網が好調であり来遊水準が高いと考えられることから、前年を上

回ると予測される。日向灘では、夏季の漁獲の主体となる10~11cm台の魚群は、春季に周辺海域で漁獲される8cm前後の魚群に由来すると考えられ、同群は6月までの漁況から少ないと推察されるため、特異的に好漁であった前年を下回ると予測されるが、2010年6月までの豊後水道南部東側において大型成魚群が主体で好漁となっていることから、前年の8月後半のような回遊がある可能性も考えられる。豊後水道南部西側では6月までの漁況から1歳魚(2009年級群)は前年並か前年を下回り、0歳魚はシラス漁や産卵状況から前年を下回ると考えられ、総じて前年並か前年を下回ると考えられる。豊後水道南部東側では、8~12月と6月の漁獲水準の間に相関があり、6月が極めて好漁であったことから、前年を上回ると考えられる。土佐湾から紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無い。

### (3) 伊勢・三河湾~相模湾(まき網、定置網、船曳網)

伊勢・三河湾および渥美外海では、伊勢湾で6月に8cm前後の0歳魚(2010年級群)が主体で順調な漁となっているものの、1歳魚(2009年級群)の来遊が前年を下回っていることや、春季のシラスが不漁であったことから、予測期間中は総じて前年を下回ると考えられる。駿河湾~伊豆東岸では12月に漁獲されると考えられる1歳魚(2009年級群)の資源水準が低いことから前年を下回ると考えられる。相模湾では上半期の漁況経過がほぼ前年並であったが、今漁期前半の主体となると予測される2009年級群の資源水準が低いことから、予測期間では前年並か前年を下回ると予測される。

### (4) 房総~三陸、道東(まき網、定置網)

2010年1~6月の常磐・房総海域における漁況は概ね低調であった。2008年および2009年の同漁期では、1~2月でも2歳魚がほとんど見られなかったが、2010年の1~4月には1歳魚(2009年級群)が主体で2歳魚(2008年級群)も漁獲され、5~6月では1歳魚(2009年級群)が主体であった。このように、1歳魚・2歳魚ともに漁獲された状況で漁況が低調であったことから、今後の主たる漁獲対象となる1歳魚(2009年級群)は低水準であると考えられる。さらに2009年級群は、5~6月において体長12.0~12.5cm台に達しており、1歳魚としては大型であるため、夏季の産卵後に死亡し2歳魚としての漁獲に繋がらなかった2007年級群と同様の経過を辿る可能性が高い。

釧路水試により実施された道東~三陸沖太平洋における流し網調査(6月22日~6月30日、北辰丸)では、CPUEが5,144尾/回で、前年の1,433尾/回を大きく上回り、1994年以降で最も高かった。魚体は11~15cmで、12.5cmが主体であった。しかし常磐・房総海域と同様に、6~7月時点で13cm前後まで成長した大型魚は夏季の産卵後に死亡し漁獲に繋がらないと考えられ、秋季の漁獲に繋がる10~11cmの魚体が出現していないことから、秋季の道東への来遊は低水準で前年を下回ると考えられる。

常磐・房総海域の1そうまきは例年、12月以降の南下期から盛漁期となる。資源状態が良好であれば、1~6月に常磐・房総海域で漁獲された9~11cm台の小型群が秋季に道東へ来遊し、冬季に12~13cm台の大型群(1歳魚、年明け2歳魚)となって再来遊し、春夏季に9~11cm台の小型群(年明け1歳魚)が主体となる。しかし2010年1~6月の漁期では常磐・房総海域での小型群が少なかったことから、道東への1歳魚の来遊も、常磐・房総への南下期初め(12月)の大型群の来遊も少ないと考えられる。このため予測期間中の1そうまきは低調で、前年を下回ると予測される。夏秋季の常磐の小あぐり、房総沿岸の2そうまきは0歳

魚(2010年級群)が漁獲の主体となるが、シラスの漁況から前年を下回ると推察される。

常磐・房総海域における1そうまきの主漁場は、4～5月に常磐南部～九十九里、6月に鹿島灘～犬吠埼沖に形成された。近年の推移から、1そうまきの漁場は8月以降同海域では形成されず、南下期は12月以降に常磐から犬吠埼周辺に形成されると考えられる。

宮城県における4～6月までの漁獲量は、定置網を主体に6,387トンで前年同期の203%であった。体長組成のモードは5月で11.5cm、6月で12.0cmであった。三陸沿岸定置網は、今期の漁況の経過が好調であったものの、1歳魚(2009年級群)が低水準と考えられることから前年を下回ると考えられる。

## ウルメイワシ太平洋系群の漁況予報

### 今後の見通し(2010(平成 22)年 8 月～12 月)

対象海域:北薩～熊野灘

対象漁業:まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群:0 歳魚(2009 年秋～2010 年生まれ)及び 1 歳魚(2009 年夏以前生まれ)。魚体は被鱗体長。

(1)来遊量:北薩及び薩南海域では前年を下回る。日向灘では前年並～上回る。豊後水道南部では前年を下回る。土佐湾では前年並～下回る。紀伊水道外域では前年を下回る。熊野灘では極めて好漁であった前年を下回る。

(2)漁期:土佐湾の多鈎釣は 11 月から。他は全期間。

(3)魚体:7～18cm の 0 歳魚が主体。

### 漁況の経過(2010 年 1～7 月)および見通し(2010 年 8～12 月)についての説明

#### 1.資源状態:

産卵量(日向灘～潮岬沖、前年 9 月～8 月)および漁獲量から資源状態を判断した。2010 年度の産卵量は 2009 年度とほぼ同様であったが、1978 年以降の産卵量の水準を高位・中位・低位に三分割すると、2010 年度は中位にあると考えられた。また、最近 5 年間の産卵量は減少傾向にあると判断した。さらに、2010 年 1～6 月の漁獲量が 2009 年より大幅に少なかったことから、2010 年の年間漁獲量は高い水準にあった 2009 年から大きく減少すると予想された。以上から、資源水準は「中位」、動向は「減少」と判断した。

#### 2.来遊量、漁期・漁場:

全体として、今期は 0 歳魚主体の漁況になると予測され、前期の漁況等から 0 歳魚の加入状況を判断した。

北薩～薩南海域では、北薩海域の棒受網が好調なことから、8～9 月は 0 歳魚(2010 年級群)主体に前年並みと考えられる。10 月以降は太平洋系群の加入状況と海況条件に左右されることから現状での判断は難しいが、全体として、前年を下回ると考えられる。

日向灘では、稚子の量およびウルメシラス漁獲量は前年を下回ったものの、4～6 月の日向灘南部大型定置網、6 月の北部・中部海域を漁場とする小型・中型まき網における 0 歳魚は前年を上回った。これらから、2010 年 8～12 月の来遊量は前年並みか前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、漁獲の主体となる 0 歳魚(2010 年級群)の資源量水準は、4～6 月のまき網漁獲量(0 歳魚主体)が前年を大幅に下回ったことから、前年の 0 歳魚(2009 年級群)を下回ると考えられる。このことから、今期の来遊量は前年を下回ると考えられる。

豊後水道南部東側では、8～12 月の漁獲水準は 4～6 月のまき網による漁獲水準と正の相関があり、4～6 月の漁獲が低かったことから、来遊量は前年を下回ると予測される。

土佐湾では、定置網入網調査等による 0 歳魚の加入状況等から、前年並み～下回ると考えられる。

紀伊水道外域西部では、前年と比較して漁獲が少なく、6 月に入って増加傾向にあるものの、来遊水準が好転してきたとは考えにくいことから、前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、4～6 月の 0 歳魚の加入は前年を下回っていると考えられることから、前年を下回ると予測される。

熊野灘では、まき網での 1 歳魚の漁獲がまとまらず、6 月には姿を消していることから、今期の漁獲主体は 0 歳魚に限られる可能性が高い。一方、春季の熊野灘沿岸定置網における 0 歳魚の漁獲量は前年を大きく下回った。これらのことから、今期はきわめて好漁であった前年を大きく下回ると予測される。

## 参 画 機 関

<p>地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場</p>	<p>三重県水産研究所</p>
<p>地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所</p>	<p>和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場</p>
<p>岩手県水産技術センター</p>	<p>徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究所</p>
<p>宮城県水産技術総合センター</p>	<p>高知県水産試験場</p>
<p>福島県水産試験場</p>	<p>愛媛県農林水産研究所 水産研究センター 栽培資源研究所</p>
<p>茨城県水産試験場</p>	<p>大分県農林水産研究指導センター 水産研究部</p>
<p>千葉県水産総合研究センター</p>	<p>宮崎県水産試験場</p>
<p>東京都島しょ農林水産総合センター</p>	<p>鹿児島県水産技術開発センター</p>
<p>東京都島しょ農林水産総合センター 大島事業所 八丈事業所</p>	<p>大阪府環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター</p>
<p>神奈川県水産技術センター</p>	<p>香川県水産試験場</p>
<p>神奈川県水産技術センター 相模湾試験場</p>	<p>社団法人 漁業情報サービスセンター</p>
<p>静岡県水産技術研究所</p>	<p>水産庁 増殖推進部 漁場資源課 資源管理部 管理課</p>
<p>静岡県水産技術研究所 伊豆分場</p>	<p>独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 中央水産研究所</p>
<p>愛知県水産試験場 漁業生産研究所</p>	